

## 三溝信教授の退職記念号に寄せて

著者	船橋 晴俊
雑誌名	社会志林
巻	51
号	4
ページ	1-2
発行年	2005-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015330">http://hdl.handle.net/10114/00015330</a>

## 三溝信教授の退職記念号に寄せて

社会学部長 船 橋 晴 俊

40年にわたって社会学部の教壇に立たれてきた三溝信先生が、2004年度をもって、本学を定年退職なされます。

三溝先生は、東京大学文学部社会学科卒業（1958年）後、東京大学大学院社会学研究科博士課程を経て、本学社会学部研究助手に就任され（1963年）、その後、社会学部において、専任講師、助教授、教授と昇格されました。この間、主に「社会学史」を担当されながら、大学運営面においては、社会学部教授会主任、社会学部長、大学院社会科学研究科社会学専攻主任、学生部長などの重責を担われました。

三溝先生が教壇に立たれた40年の間は、世界および日本社会の状況も社会科学のあり方も大きく変化した時代であり、その中で法政大学もさまざまな問題にぶつかり、さまざまな困難と変革を経過してきた時代でありました。その過程では、並々ならぬ御苦勞があったことと拝察されます。

三溝先生の社会学研究は、歴史と学問についての広大な視野と長期的展望を備えたものであるとともに、各時代の社会学的知と社会的現実を緊密に関連させながら把握するという志向によって支えられており、そのことは主要な著作に如実に表現されています。

『市民社会における社会と個人』（1968年）は、ホッブス、ロック、ルソー、スミス、ミルなどの大思想家がどのように「社会と個人」のあり方を捉えてきたのか、彼らの把握の変遷の歴史的・現実的根拠は何なのかという主題を、広大な視野のもとに、一人一人に内在しながら検討しています。本書に前後して、フロイド、フロム、ミルズについても、「自我」や「疎外」概念を鍵にした諸論文を発表されています。

『社会学講義』（1986年）は、教養課程での社会学の教科書として執筆されたものであり、「集団としての社会」「文化としての社会」「システムとしての社会」「社会学の歴史」をその内容構成としています。本書の根本にある社会学像は、「時代の診断」あるいは社会の全体的見取り図を描くような社会学であり、社会学を学ぶ

者がそのような視野を有することへの期待がこめられています。

『社会学的思考とはなにか』（1998年）は、長期のスパンで社会学的思考の形成や変化に視点を当てた作品であり、社会学成立の前史をマキャベッリから説き起こし、成立期の社会学をコント、マルクス、スペンサーに焦点を当てて描き、近代社会学の形成をジンメル、ヴェーバー、デュルケームを柱に説明しています。

さらに、社会学分野における近年唯一の大項目主義の辞典である『現代社会学辞典』（1984年、有信堂）の編集を編者の一人として担当し、自ら「社会変動」の項を執筆されました。

社会学のアイデンティティが多様化し拡散の傾向を見せている現代にあって、社会学の源流となる古典的大家に絶えず立ち返って行かれた姿勢は、社会学のあり方と社会学教育のあり方を考えるにあたって、豊富な教示を私たちに与えてくれます。

教授会への出席を大切にされ、発言される回数は控えめでありましたが、良識とはこういうものかということ、先生からは何度も教えていただきました。退任にあたり、長年にわたる本学での御尽力・御貢献に感謝と敬意の念をこめて、社会学部教授会として、名誉教授へ推挙させていただきました。教授会メンバーから去られることは寂しいかぎりですが、退職後も社会学部を見守っていただくようお願いしますとともに、健康に留意され静謐な思索の日々がこれからも続いて行くことを祈念しています。